

書 評

岡橋 秀典『現代農村の地理学』 古今書院 2020年 iv+126p 2,600円+税

西 野 寿 章 *

本書は、日本の農村地理学研究をリードされてきた岡橋秀典教授が「学部レベルの教科書を想定して」まとめられたものである。本書は、主に戦後の日本農村の変容を時系列で学べる一方、農村の経済的側面、社会的側面、文化的側面、自然的側面など、農村の構成要素を幅広く学べ、さらに学修が深められるように文献目録、コラムが編集されている。

第1章「現代の農村」では、まず、私たちの生活と農村の間には、どのような接点があり、結びついているのかを考えさせ、農村を身近なものとして認識させるように組み立てられている。次いで、人類史における社会の発展との関係からみた農村の存在形態の変遷が説明され、農村の自律性は、産業社会化の農村浸透によって非農業化が進んで弱体化し、農村の多くは中心地域に統合され従属する周辺地域としての性格を強めてきたこと、都市住民の流入に伴う混住化社会が形成されるようになったことなどが説明されている。そして、21世紀において「自然生態系が卓越する低人口密度地域としての農村の特性が再び評価されるのだろうか」、これを考えてみたいと読者に投げかけている。

第2章「農村地理学とは」では、地理学の体系において農村地理学は、都市地理学、開発地理学と並んで、地域研究の指向性が強い地誌学の1分野に位置づけるのが適切だとし、都市と農村が明確な境界で区切られていない現代において、見えにくくなっている農村空間の特質を明らかにし、それらについての理解を深め、よりよい国土空間の整備のあり方を考えることが求められており、この課題に応えるのが現代の農村地理学であると、その学問的役割が示され

ている。次いで、農村地理学に関連した集落地理学、社会地理学、農村社会学における重要な研究成果、高度経済成長期の農村変化分析研究の見解、最近の研究動向を紹介した上で、これからの農村地理学は、農村だけを分離して考えないこと、農村地域の全体像を追求すべきこと、農村をマルチスケールの時空間の中で捉えること、農村地域発展のビジョンを考えてみるものが大切だと述べられている。

第3章「人口変化と農村空間の変動」では、農村人口の減少過程については過剰人口説と地域不均衡説の2つの捉え方のあることが解説され、過疎化過程については経済的基盤の弱体化説と労働市場を通じた労働力再編成説の大きく2つの流れのあることが解説されている。しかし、現代農村の現状は、これらの理論ではもはや説明できず、都市からの距離による勾配原理と機能特化による分化原理も作用しているとの見解が述べられている。

第4章「グローバル化と農村」では、今日の農村変化の重要なファクターの1つであるグローバル化が農村に与えた影響について、労働集約型の工場の海外移動に伴い地方経済が変化、衰退してきたことなどが述べられる一方、ポスト生産主義との関連において農業の多面的機能を評価する動き、近年のインバウンド需要の増加によって農村資源の再評価がなされるようになったことなどに触れ、内向きの傾向の強かった日本農村の地域振興も、国連のSDGsを含めたグローバルな視野を持ったものになりつつあることが論じられている。

第5章「戦後日本の地域構造の変化と農村の変貌」では、国土開発政策をふまえ、戦後の農

*高崎経済大学

村の再編過程と、それに伴う中心周辺構造の形成、農村経済の構造変化と「周辺地域」化、グローバル化・知識経済化時代の地域構造と農村空間について考察されている。農村の自然生態系に依拠した伝統的な経済システムは、戦後の高度経済成長期に入ると、商品経済の地域構造の中に巻き込まれて、きわめて短時間の間に自然生態系との結びつきを弱めたこと、都市・農村の二重構造から中心・周辺という統合構造へ再編され、多くの地方の農村は周辺地域としての性格を強めてきたことが論じられている。

第6章「現代の食と農」では、農業の産業化の意義を歴史的に概観し、フードシステムとフードチェーンについての形成、アグリビジネスの展開について述べられている。現代の食料の生産と消費は、遠距離輸送を伴う流通システムや、複雑なフードチェーンにより成立しているが、災害時に食糧供給が断たれたりする脆弱性を伴っているシステムであること、産業化されたアグリビジネスは農家ではなく企業組織が担っていること、種子市場において寡占化の進んでいることなど、システムの高度化、複雑化の一方、身近な問題として認識しておく必要があることが述べられている。

第7章「農業の変貌と農業地域の変動－戦後1980年代まで」では、戦後の農地改革からグローバル化が始まる前までの日本農業と農村地域の変化について論じられている。戦後の農村、農業の基本的な枠組みは、農地改革、農地法制定、農業協同組合の発足、食糧管理制度や土地改良制度、農業普及制度の制定などによって形成されたものの、自立経営農家の育成を目標とした農業基本法は、1970年の米の生産調整政策の導入によって挫折したと解説されている。その一方で、1960年頃からの都市部での需要拡大に対応した専作的な商業的農業が展開し、卸売市場法もフードチェーン形成に作用して、輸送圏芸地域、近郊・中郊、開拓地などで産地が形成され、大都市近郊農村では、多様な農産物直売所が出現するに至ったことなど、戦後の農村の変貌が述べられている。

第8章「グローバル化時代の農業地域の変動」では、まず1986年のGATTウルグアイ・ラウンド農業交渉開始を画期としたグローバル化の進展に対応した日本農政の動きと農村農業の動きを追っている。本書の分析によると、前半期(1965年～1990年)、後半期(1990年～2015年)と分けた場合、農家数では全国的には後半期で減少率が增大しており、とりわけ、東北、北陸の減少率が高くなっていること、関東・東山、東海、近畿の大都市圏を有する地方は、減少しているとはいえ、東北、北陸との格差が明瞭となって、東日本、西日本の差よりも、中心と周辺の差異が目立つようになっていくことが指摘されている。

第9章「日本の農業と農村の変貌－地域編」では、工業化の影響を強く受けた広島県福山市における生産量日本一のクワイの産地形成、種なしブドウの産地形成要因を探り、また、大分県の「一村一品運動」のモデルとなった大分県日田市大山町(旧大山町)における独自の地域振興の成立条件について考察している。

第10章「農村の環境問題」では、近年、農村で問題となっている環境問題を取り上げている。耕作放棄や獣害、人工林の放置などの問題がなぜ発生しているのか、その要因を戦後の農政の展開と農村の対応の結果としての土地利用変化に求めている。環境保全における外部経済と外部不経済の調整問題は、私経済の合理性によって生じる環境面の外部不経済と、他方私経済として対価されない農林業が有する環境や景観、国土保全などの外部経済の問題に関わっていると指摘する。

第11章「農村の景観保全と景観づくり」では、景観への関心が高まっているものの、農村環境の維持管理の主体であったムラ社会は今日著しく弱体化し、そこへ都市住民が流入して混住化社会を形成し、そのため、景観の管理主体が不明瞭となり、景観評価も新旧住民間で分裂がみられるようになり、その背景には、土地利用制度など地域全体の整備のあり方に問題があると指摘する。そして、農村の景観保全における課

題は、環境と人々との生きた関係性の継承にあると指摘している。

第12章「農村問題と農村政策Ⅰ－中山間地域の変化と問題の構造－」では、戦後の中山間地域の変化、その構造と政策的課題、集落の変容とコミュニティ、フードデザートを事例とした生活関連サービス問題を取り上げている。中山間地域は、周辺地域化が進んだとはいえ、限定的とはいえ周辺型経済が成立していた。しかし、市町村合併、地方交付税減額、公共投資の重点化・効率化、郵政民営化、農協改革などの政府による新自由主義的な構造改革は、中山間地域のそれまでの存立基盤を掘り崩すものであったと指摘している。

終章である第13章「農村問題と農村政策Ⅱ－持続可能な中山間地域に向けて－」では、筆者が指摘してきた中山間地域問題の構造の内、経済的衰退と周辺地域化、生態系空間の保全問題について掘り下げて議論されている。前者については、地域内発型アグリビジネスの内部化に成功した大分県旧大山町における農村経済複合化のプロセスを再評価し、後者については、豊富な森林資源が蓄積されているものの、産業としては低迷している林業の今日的課題について論及している。そして、広井良典が提起する「定常型社会論」に注目して、成立可能産業を考察して中山間地域の将来像を検討している。

紙幅の関係から不十分な点が多々あると思われるが、以上が本書の紹介である。この1冊を読んだだけで、現代農村がどのような過程を経て、今日的な姿を見せているのかを理解することができる。たいへん読みやすく、分かりやすく、受講者は農村地理学の世界へと引き寄せられていくであろう。

ところで、本書の「まえがき」に「翻訳書を除けば、日本では農村を対象としたこの種の地理学関係の書物はなかったように思われる」と述べられている。確かに、農村を対象とした地理学書は、奈良大学元学長・石原潤教授、本書の筆者である岡橋教授らによるH.D.クラウトの"RURAL GEOGRAPHY"の翻訳書である『農

村地理学』（大明堂、1983年）しか見当たらず、貴重な一書を得たことに感謝したい。一読して、学部生時代から農山村地域を歩いて研究されてきた岡橋教授の地域へのまなごしを随所で感じ取ることができた。現代農村研究の入門書として、学部生に留まらず、農村に関心を寄せている多くの人々に一読を勧めたい。

